

# 第26回夏季大学「新しい気象学」開講のお知らせ

——天気予報を支える科学——

教育と普及委員会

**主催：**日本気象学会

**後援：**気象庁，日本地学教育学会，財団法人日本気象協会

この講座は、新しい気象学の普及を目指し、主として小・中・高校の理科・地学等の担当教師を対象として行うもので、特に教職にある方のご参加を希望します。また、一般の方で気象学に興味や関心のある方の参加も受け付けます。

従来4日間の日程で6つの講義を行っておりましたが、時間を効率よく使うために、1日に3つの講義を組み、日程を3日間に短縮して講義を従来より2つ増やしました。詳しくは次ページの講義時間表をご覧ください。

受講料は据え置きましたので、今回も多数のご参加を希望します。

## 記

**対象：**小・中・高校の理科担当教師および気象愛好者を主体とし、その他学生および一般の希望者。

**受講料：**一般6,000円，教員5,000円，気象学会員・日本地学教育学会員・学生4,500円（消費税込み）。

**日時：**1992年8月3日（月）9時（受付開始）

8月5日（水）17時（終了予定）

**場所：**気象庁講堂

（東京都千代田区大手町1-3-4）

ただし、台風襲来時等には講堂の使用が不能になりますので、会場を他に変更することもあります。

**申込先：**〒100 東京都千代田区大手町1-3-4

気象庁内 日本気象学会事務局

Tel. 03-3212-8341（内線2546）

Fax. 03-3216-4401

**申込締切：**1992年7月24日（金）

なお、7月20日（月）までに受講料の入金が確認できた方には、テキストを事前にお送りします。（申込書参照）。

**申込方法：**次ページの様式の申込用紙に記入して申し込んで下さい。参加決定次第受講票をお送りします。

受講料は、1. 現金書留、2. 郵便為替、3. 郵便振替口座（東京3-5958、加入者名 日本気象学会）のうち適当なものをご利用下さい。

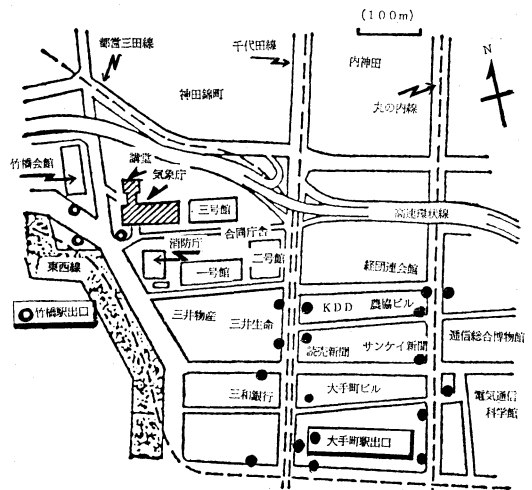
**テキスト：**受講者には本講義のテキストを1部配布します。なお、テキストのみを希望される方は、代金を添えて必要部数を申し込んで下さい。値段は1部1,000円とし、送金方法は受講料に準じて下さい。

**その他：**受講者で、期間中に日本気象学会への入会を希望される方には、本年度の会費を半額にします。また、期間中は学会出版物を会員価格で頒布しますのでご利用下さい。

## ●会場への交通

地下鉄 東西線竹橋駅下車

地下鉄 千代田線、丸の内線、半蔵門線、都営三田線  
大手町駅下車



第26回夏季大学「新しい気象学」受講申込書

第26回夏季大学の受講を希望いたしますので申し込みます。

受講料は、1. 現金書留、2. 郵便為替、3. 郵便振替口座で送りました。

(受講料の送金方法1～3のいずれかを○で囲んで下さい)

1992年 月 日

氏 名 年齢 歳 職業

自宅住所 (〒 ) 電 ( )

勤務先等名称  
連絡先 (〒 ) 電 ( )

所属学会

テキスト送付希望の方はどちらか一方のに×印を記入して下さい(7月20日迄)。

..... 切 取 線 .....

第26回夏季大学「新しい気象学」講義時間表

——天気予報を支える科学——

1992年	10:00~11:50		13:00~14:50		15:10~17:00
8月3日 (月曜日)	流体中の流れ、渦とその役割 (実験流体力学) 木村 竜治氏 (東京大学海洋研究所)	昼  休	天気予報と天気図—基礎編—  永沢 義嗣氏 (気象研究所)	休	コンピューターによる天気予報  隈 健一氏 (気象庁数値予報課)
	大気中の渦に限らず、海洋上の渦など地球上の渦に関する話題とその分析について考える。	み	天気予報と天気図のかかわり、天気予報の道具としての天気図の見方、天気図による大気像のとらえ方を知る。	憩	大気の初期条件(客観解析)から大気数値モデルを時間積分することによって、気象現象を予測する数値予報。その原理と現状について、理解を深める。
8月4日 (火曜日)	風を捉える 荒川 正一氏 (東京家政大学)	昼  休	天気予報と天気図—演習編—  永沢 義嗣氏 (気象研究所)	休	気象庁施設見学 (台風の襲来、地震の発生等の場合は見学を中止することもあります)
	ジェット気流、季節風からフェーン、海陸風、ビル風など、我々はいろいろなスケールと種類の風を経験する。これらの風、とくにローカルな風について学ぶ。	み	前日の講義をもとに、天気図を通して生きた気象の姿に肉薄し、その変化を読む。	憩	
8月5日 (水曜日)	数値モデルで見るメソ・スケールの大気の流れ 永田 雅氏 (気象研究所)	昼  休	メソ天気系概念モデル (中規模な天気現象を考える) 入田 央氏 (気象庁予報課)	休	天気予報の歴史と新しい天気予報の目指すもの 宮沢 清治氏 (日本気象協会)
	豪雨・豪雪の発生には不可欠と考えられる持続的な強い上昇流を含むメソ・スケールの気流系を数値モデルで再現してメカニズムを探る。	み	天気図では、台風一過の秋晴れを期待したのに翌日は雨。なぜだろう。天気図には表せない規模(メソ)の天気現象が発生する仕組みについて図を使って考える。	憩	天気の子知は大昔からの人間の夢である。ことわざ、測器、地上・高層天気図、数値予報の各時代を経て、天気予報は著しい進歩をとげたが、さらに今後の発展の方向を考える。